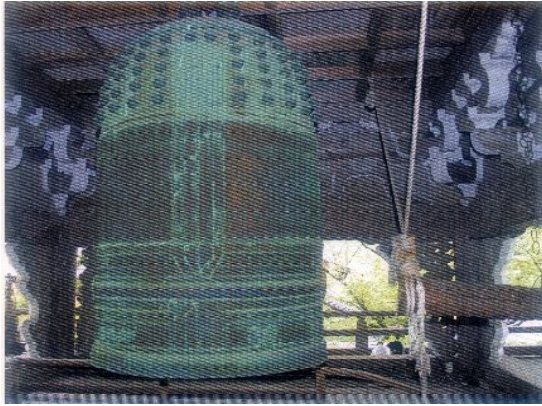


「もとはこちら」のお話し

№42 今月のテーマ こころの花が開くとき

2010年（平成22年）6月19日（土）



身に覚えのない事は
身に覚えのあることよりも
根が深い

（生き続けている根は、縁がそろえば芽を吹き出す）

（平井謙次作 日めくりカレンダーより）

最近読んだ本の中に、こういう話がありました。

「あつ、日本中の子供達が、どの子もすべて日本語を喋っている」という事を発見して、飛び上がって驚いた人の話です。日本中の子供が日本語を喋るという、いわば全く当たり前の事の中から、彼は「能力というのは生まれつきのものではなく、それは環境が作りだすものである」という、大発見をしたのです。この発見により、彼、鈴木鎮一（しんいち）は、「全ての子供達は、与えられたその環境に応じたように、よく育つ」、そして「環境にないものは育たない」という強い信念を持つようになりました。どういう事かというと、それは全く当たり前の事なのですが、例えば、日本語というものに全然触れる機会の無い人には、日本語を話したり聞き取ったりする能力は身に付かず、そしてまた例えば、そろばんのない国の人には、そろばんを使って計算をするという能力は育たないという様な事です。要はどんな能力であっても、それを引き出すための環境、即ち縁となるものがなければ、その能力は育たないという事です。

この発見によつて彼は、子供達が生まれながらにして持っている、人間としての高い能力を引き出し育てる為の幼児教育に、自分の全生涯をかける事になりました。

「自分の目的は、音楽家を育てる事ではない。立派な人間を育て、温かい人間性を養う事だ」という彼の手による幼児教育は、こうして始まりました。そして戦後間もない日本にあつて、世界中の音楽家たちを驚愕させ、涙を流して感動させ、やがてヨーロッパはもとより、あのアメリカの権威あるジュリアード音楽院にまでも大きな影響を与え、世界中に大きな功績をもたらす結果となったのです。

誰でも最高の人生を送っている、という発見

平井先生の発見も、ある日突然にして訪れました。断食中に聞いた鐘の音の中から、それまでの常識を覆（くつがえ）してしまう程の大発見をされたわけです。

「私達の命というものは、肉体の生死を越えて、生き通しである」という事と、「全ての人がある一定の法則のもとに生かされており、その人の人生の中身がどのようなものであつても、それは法則通りの、最高の人生のはずである」という事などでした。ところで、この平井先生が創られた太陽保育園の保育目標の中に、



北原ゆり筆

「いかなる環境にも順応できるように、適応能力の拡大を図る」というのがあります。子供達の適応能力を拡大するために、先生は意識的に色々な環境を作り出していきました。そしてそれを次々と子供達に与える事によって、遅しくて元気な子供達を育てられたのです。

「色々な環境を与える事によって、人は強く逞しくなる」というこの平井先生の発見と、先の鈴木鎮一の「環境にないものは、育たない」という二つの発見を重ねてみると、とてもおもしろい事が分ります。

鈴木鎮一のもとには、バイオリンを習いたいという子供達が次々と訪ねて来たそうです。

本当に様々な特性を持つ子供達がいたそうです。極端に手先の不器用な子もいれば、小児麻痺でからだの半分が動かない子、スローテンポで、何をするにも人の二倍も三倍も時間の掛かる子や、目の見えない子などもありました。自分の手には負えないのではないかと、初めは受け入れをためらった子供もいたそうですが、結局彼は分け隔てなく、全ての子を受け入れる事にしました。

それは「どのような子供であっても、与える環境に応じた様に、よく育つ」「指導者である自分の育て方ひとつで、一人の落伍者も出さずに、立派によく育つはずである」という、揺るがぬ確信があったからです。

子供達の持つてゐる能力をどのようにして引き出し育てるか、子供の側の問題ではなく、すべては指導者である自分の問題であると考えたのです。要は、もとはこちらの考え方をしたのです。

さて、自分に向けられた課題は、どのようにしてこの子達の中に宿る素晴らしい人間性を引き出し育てていくか、どうしたらこの子達に、美しい心の人に育ってもらえるかという事でした。

そして次の課題が、いかにして子供達に音楽の楽しさ素晴らしさを、全身全霊で感じ取らせ、その感じ取ったものを表現できる能力を身に付けさせるかという事でした。

「環境にないものは育たない」という確信のもと、いつも、より良い環境づくりに専念し、自ら工夫し考え出した事を、次々と子供達に与えていきました。その結果、子供達は見事な成長を見せ、結果は冒頭で述べた通りです。テスト等をして選んだのではない、ごく普通の子供達が、信じられないような素晴らしい演奏をして、世界中を驚嘆させたのです。結局彼は、様々な特性の子供達を受け入れる事によって、自分自身の「教育者」と

しての能力」を上げる結果となったのです。そして子供達も、夫々が元々持っていた音楽的な才能を、彼の与える環境を素直に受け入れる事によって、大きく開かせる事が出来たのです。

この鈴木鎮一が全ての子供をわけへだてなく受け入れたように、平井先生も全ての人を受け入れられました。

狼が育てれば、人の子も狼に

環境が私達にとって、如何に大きな影響を与えるかという事については一卵性双生児の兄弟姉妹を、異なつた環境で育てるとどうなるか、というような教育実験などもなされた事があつたようですが、次のような興味深い話もあります。

1920年、インドの奥地で狼に育てられた二人の女の子が見つかりました。当時インドの土民の間では女兒の捨て子がしばしば行われ、この子供達は別々の狼に拾われて、夫々の狼の乳を与えられながら育てられたようです。

見つかった時は、二歳と七歳くらいと思われましたが、人間の子でありながら四つんばいで歩き、夜目がきき、手を使わずに口で生肉を食いちぎつて食べたという事です。

二人とも頭や肩や胸に長い毛が生え、夜行性の行動をし、夜になると決まって同じ時刻に三回、他の狼と一緒に遠吠えをし、それはどうしても止めさせる事が出来なかつたという事でした。

下肢は股のところで曲がつて伸びず、暑い時にも汗は出ず、犬のように舌を垂らしてあえいだそうです。

写真なども添えられたこの発表に、世界中が大騒ぎになったのですが、二人の女兒は与えられた環境に應じ、即ち狼としての環境に見事に適応して、狼として立派に生きていたのです。

この話については後日、少し信憑性しんぴやうせいに問題があるのではないかといううな説も出ていますが、それはともかくとして、人間は、人間としての環境に置かれ、人の手で育てられてはじめて人間らしい人間になるという事は間違いないように思います。

人間の子供達は当然のことながら、人間としての肉体や素質を持つて生まれてきます。

しかしこの例が示すように、狼に育てられれば狼のような子供になり、鬼のような人間に育てられれば、鬼としての環境に應じて、それにふさわ



しい子供に育つ可能性がありますし、また菩薩のような人に育てられれば、菩薩のような人に育つ可能性があるという事です。

良い面が出るような環境に子供を置けば、その環境に応じて子供の中の良い面が育ち、悪い面を引き出すような環境に子供を置けば、子供の中の悪い面が育って表に出てくるのです。



発芽の条件は、種自身の中にある

一方この事を子供自身の立場から眺めてみますと、どういう事になるでしょうか。

子供はあらゆる可能性を秘めて、この世に生まれてきます。その数ある可能性の中で、どの面を出し、どのように育てられていくかという事は、いま言ったように、自分に与えられた環境次第です。

しかし、どういう環境が与えられるかという事については、子供自身は自分では選べないというのが、これまでの一般常識でした。しかし果たして本当にそうなのかという事です。

例えばここに一粒のカボチャの種があるとします。カボチャの種は、自分がどこに蒔(ま)かれるかという事については、自分で選ぶ事はできません。

しかし蒔かれた場所が、運よく発芽の条件に適した場合には、そこで発芽し、育っていきます。

しかし例えばカラカラに乾いた所や、零下何十度というような極寒の地などに蒔かれた時には、カボチャは発芽致しません。ということは、もともと種の中に、「自分はこういう環境に蒔かれた時にだけ、発芽する」という、発芽のための絶対条件を自分の中に持っているという事です。

この条件に合わない場合には、自分は決して発芽しないという事です。この事を逆からいえば、ここで発芽したという事は、この環境が発芽のためにふさわしい場所であったという事が分ります。当たり前ですが、初めから原因となるものが何もなければ、どんな環境に置かれても、またどんな縁に触れても、一切何とも起こらないのです。

これらカボチャの発芽に必要な温度や湿度などの事を、一般には第二原因とか、縁などと言いますが、それを環境とか刺激などと言い変えてもいいと思います。

要は、自分の持っている発芽のための条件と環境がぴったりと合った時だけ、種は芽を出すのです。

ちょうど良い所に生まれる私達

私達人間の場合も、このカボチャの場合と同じ事が言えます。今生きている人は、あのカボチャが「発芽したい」という深い絶対の思いを持っていたから発芽したように、「生まれたい、自分の花を咲かせたい」という強い命の想いが、「この肉体を持つ以前の自分」の中にあつたという事です。そしてまた、あのカボチャが、自分にとって丁度良い温度や湿度を選んで発芽したように、私達も自分の誕生のために一番ふさわしい親や時代を選んで、この世に生まれてきたという事です。

親という縁に触れなければ決して生まれる事はなかったのですが、その親を選んだのは自分です。

そしてカボチャの成長にとって太陽や水や肥料が必要であるように、自分の人生に必要な家族や兄弟、友人知人、先生などを選んで、それらの人に育てられながら、今に到っているという事です。

ここで一番大切な事は、親を初めとして縁となる全ての人は、自分で選んでいるということです。

仮に触れ合った相手が自分にとって何の縁もゆかりもない人の場合には、カボチャが極寒地では何の反応も示さず、発芽しないように、私達の上にも何の反応も起きず、何の変化も起きないのです。

ですから、もしも触れ合う事によって、身の上に何かが起きたというような場合は、元もとの自分の中に、そういう事が起きる要素、原因があつたという事です。

もしも自分の中に、「こういう人生を送る」という原因が何もなければ、どんな縁に触れようと、どんな環境に身を置かれようと、何事も起きず、決して自分は生まれてくる事もなかったし、こういう人生を送る事もなかったという事です。

以上の事を煎じ詰めていえば、誕生から現在に至るまでの間、自分が体験した全ての事の原因は、元々の自分の中にあつたという事です。

ですから「親が勝手に生んだのだ」とか、「自分は運が悪い」とか、「経験した事は、たまたま偶然の結果である」と等と言うのは、自然の摂理に反する考え方であり、道理に合わないという事です。

このような宿命のもとに生まれ、このような人生を送る原因は、元々の自分の中に全てあつたという事です。



した事をされる中で、学びあう人生

では、なぜこの様な人生を送る原因を、元々の自分が持っていたかという事です。

私達は一人残らず全員全部、因果応報という自然の摂理の中で生かされております。因果応報などというと、どうにも古臭く、また宗教臭くて嫌だと思われる方もいると思いますが、要は、「自分がした通りの事を、いつかはされる」という、単純明快な自然の摂理です。

そしてこれは誰もが逃れる事のできない自然の法則です。

自然は常に調和をとるうとして働いています。

それで、した事をされれば、プラスマイナスゼロ、即ち貸し借り無しの状態になって、バランスが取れるのです。

しかしこの「した事をされる」という法則を知らず、例えば人から何か気に入らない事をされた時に、「これは以前に自分がやった事を、されただけだ」と気がつかず、相手を憎んだり恨んだり、或いは仕返しをしたりすれば、その事が次の新たな原因となって、いつの日かまたこの摂理通りに、「自分がした通りの事をされる」という事になります。

される事によって、改めてまたバランスが取れるのです。

このように自然は常にバランスを取りながら、元のところに戻ってきます。たとえば図形などでも、三角であるのが四角であるのが丸であるのが、線を辿れば必ず原点に戻り、季節も巡り回って元に戻り、出発点に帰ります。

私達が描く人生模様も同じです。例外なく全ては自分に戻ってくるのです。

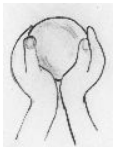
この因果応報の事を平井先生は、「想った事を想われ、言った事を言われ、した事をされる」と端的に表現されました。

そしてこの因果応報の世界にあって、因果応報の世界から抜け出す方法もあわせて教えて下さいましたが、それはまた別の機会にお話させて頂きたいと思います。

内なる自分にふさわしい環境が開ける

自分がどのような環境に生まれるかは、内なる自分、潜在の自分が決める事です。

例えば音楽の素質のある魂は、その素質が発揮できる環境を自ら選んで



生まれる事が多く、スポーツに秀でた素質の持ち主は、またそういう親や指導者となる人のいる環境を選んで生まれてくるのです。

縁には見える縁、見えない縁など様々ですが、私達は自分の魂にとって最もふさわしい時代や場所や親を選んで生まれて来るのです。

すべては自分で選んでいるのです。

勿論それは、因果応報の摂理に基づいての必然的な選択であり、内なる自分を表すためにです。

ところで、子供は幾つと数えられる間が勝負だという説があります。

一つ二つと数え、九つになるまでの生き方が、その子の一生の方向性を決めるという事です。

先の狼に育てられた子供達の場合もその通りで、その後人間が引き取って育てたそうですが、結局最後まで普通の人間として生きる事は出来なかったようです。

私達は既に九歳を過ぎ、青年となり、大人となりました。

しかし少なくとも人間の手で育てられた私達には、手遅れという事はありません。

縁である環境とは、内なる自分に見合ったものしか与えられません。ですから例えば、毎日酒を飲んで、バクチや喧嘩ばかりしているような人には、そういう生き方にふさわしい同じレベルの人との出会いがあり、日々心穏やかで、人の幸福を祈ってつましく謙虚に生きているような人には、またそういう人にふさわしい心温まる出会いがあるのです。

しかしどんな環境の中にあっても、人に感動を与え、周囲の人にも良い影響を与え、自他共に幸せになっていくような人というのは、平井先生をはじめとして、あの鈴木鎮一の例でも分る通り、すべての人が「もとはこちら」の精神で生きている人であるという事は間違いないようです。

自分を取り巻く環境は、生き方次第で変わります。生き方と、自分の置かれる環境は、常に連動しています。

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP

<http://www.motoha-kochira.com>

mail: data3@motoha-kochira.com